

九世紀前半ビザンツにおける皇帝権力

——テオフィロス政權を支えた人々——

小林 功

【要約】 八世紀末から九世紀初頭にかけて、ビザンツ帝国の政情は大きく混乱していた。その背景には、相次ぐ政權交代などによる皇帝権力の弱体化とそれと対照をなす高官・高位保持者たちの政治的影響力拡大、さらには八世紀には安定していた地方と中央の関係の動揺があった。このような混乱状態に終止符を打ち、帝国に再び平穩をもたらした皇帝が本稿で集中的に分析を行ったテオフィロスである。本稿の検討課題は以下の二点である。第一にテオフィロスが即位するまでの約半世紀の情勢にも注意を払いつつ、テオフィロスがいかにして高官・高位保持者たちの強大な政治的影響力を馴れ馴れしいか検討する。また第二点目としては、中央に対して反抗を繰り返していた地方に対して、テオフィロスはどのような関係を構築しようとしていたのか、という点である。本稿での分析によって、九世紀前半のビザンツ帝国の皇帝権力の動向に関して、新たな知見が得られることだろう。

小林 七九卷五号 一九九六年九月

一 はじめに

テオフィロス（在位八二九—八四二年）はビザンツ帝国の歴史の中でも、名君の誉れ高い皇帝の一人である。確かにテオフィロスの治世についての年代記等の記述を見ると、彼が強力なリーダーシップを發揮して政治を主導していたことが強烈にイメージづけられる。しかしテオフィロスが統治していた時代、そして彼に直接先行する時代にビザンツ帝国が置かれていた歴史的状況を考慮にいれると、テオフィロスの行使していた強力なリーダーシップは自明の状態ではない。

第一に考えねばならないのは、皇帝と高官・高位保持者たちとの関係である。ビザンツ帝国は強力な中央集権的行政機構・官僚制度を持っていた。行政機構の各要職にあり、皇帝の意を受けて政策を実行する高位保持者・高官たちがいなければ、皇帝も自らの意を国政に貫徹することはできない。自然、皇帝と高位保持者・高官の関係が、実際の政治遂行における皇帝の発言力や主導権に大きな影響を与えた。特に陰謀やクーデターが相次ぎ、皇帝権力がきわめて不安定な状態となっていた八世紀末以降、高官たちは大きな政治的影響力を持つようになっており、彼らと皇帝がどのような結びつきを形成していたかが、皇帝権力の動向を考える上で無視できぬ重みを持っている。

中央と地方との関係も看過できない。七世紀末から八世紀初頭に相次いだテマの反乱はレオン三世（在位七一七―七四一年）とコンスタンティノス五世（在位七四一―七七五年）という、有能な軍人皇帝の時代に抑えられた。しかし八世紀末以降、中央と地方との関係は急速に不安定になっていき、テオフィロスが即位するまでの約半世紀、地方では大規模な反乱が相次いだ。要するに皇帝の権力や威信が帝国の隅々にまで行き渡っていたとはいいがたい状態だったのである。

だがテオフィロスの時代には皇帝権力は急速に立ち直る。テオフィロスは国政の遂行に際して、先任者たちとは比べ物にならない強力なリーダーシップを発揮している。また中央と地方の関係も安定を取り戻すとともに、中期ビザンツ国家の地方行政組織も完成される。こうした状況は、テオフィロスの治世に先行する約半世紀とは明らかに異なっている。中央と地方との関係の安定化と、高官や高位保持者たちへの強力なリーダーシップの行使が、テオフィロス時代になにゆえ可能となったのだろうか。テオフィロスの「公正さ」や有能さにその背景を求めようとする従来の説明^①は不十分で、明らかに説得力に欠ける。それゆえ本稿では、八世紀末以降動揺していた皇帝権力と、中央と地方の関係がなにゆえテオフィロス時代に安定し、強力な皇帝権力が行使できたのか、また皇帝を支えていたのはどのような社会的背景を持った人々であったのか、分析していきたい。

テオフィロス時代のビザンツ帝国の動向や展開について論じた研究は、二〇世紀初頭のJ・B・ビューアリの著作を嚆矢

として、J・ロッサー^③、さらに八世紀末から九世紀前半にかけてのビザンツ帝国の「復活」を主題とするW・T・トレッドゴールドの考察^④などがある。しかし、これらはいずれも概説的なレベルに留まっており、皇帝権力や政治支配層の動向に関する実証的な考察は進んでいない。また九世紀前半に関しては、利用できる資料がきわめて限られている。本稿で利用できる記述資料としては八一三年までを扱った『テオファネス年代記』^⑤、八二三年以降の『ゲオルギオス年代記』^⑥、『統テオファネス年代記』^⑦、『シュメオン年代記』^⑧、『ゲネシオス年代記』^⑨がある。しかし『統テオファネス年代記』、『シュメオン年代記』、『ゲネシオス年代記』は一〇世紀中盤以降の成立であり、同時代資料ではない。また『統テオファネス年代記』や『ゲネシオス年代記』はテオフィロスの子のミカエル三世（在位八四二—八六七年）を暗殺して即位したバシレイオス一世（在位八六七—八八六年）の行動を正当化するため、テオフィロスやミカエル三世の行動を歪曲して記述している箇所も多い。さらにイコノクラスム（聖像画破壊政策）を推進したテオフィロスに対しては各年代記、特に『ゲオルギオス年代記』は批判的である。それゆえ年代記の利用に際しては、特に本稿で扱うような問題に関しては、慎重が必要とされるだろう。^⑩ これらの年代記のほかに利用できる資料はごく少数の聖人伝や書簡類、若干の考古学的資料しかない。

このように利用できる資料や先行研究はきわめて貧弱であり、本稿で扱うような問題に対して詳細な分析を行っていくことはきわめて困難である。だが近年研究が進められつつあるプロソポグラフィックな研究手法を利用して、^⑪ 可能なかぎり客観的で説得力のある考察を進めていきたい。

だが説得力のある考察を行うためには、テオフィロスの時代のみならず、テオフィロスの即位前の政治的混乱の時代の展開を等閑視しておくことはできない。特に重要なのはテオフィロスに直接先行する皇帝であるミカエル二世（在位八二〇—八二九年）の時代である。ミカエル二世は宮廷クーデターで即位し、即位直後には小アジアで大規模な反乱が勃発している。彼の治世は政治的困難や苦境に悩まされた時代であった。こうした状況はテオフィロスの時代の政治的状况とは様相を根本的に異にしている。しかしながら資料が少ないこともあって、皇帝と高官の関係をめぐるとま

った研究はきわめて少なく、なお検討の余地が大きい。ミカエル二世の時代とテオフィロスの時代の皇帝と高官たちの関係や、中央と地方との関係について比較分析を行うことよって、九世紀前半の皇帝や権力について新たな視野が開けてくる点は疑問の余地がない。そのため本稿では、はじめに八世紀から九世紀初頭、そしてミカエル二世時代までの皇帝と高官・高位保持者との関係、そして中央と地方の関係を検討する。こうした検討を踏まえた上で、こうした諸関係がテオフィロス時代にどのように変化し、皇帝権力の強大化をもたらしたのかについて分析する。こうした分析を通じてこそ、九世紀前半期にビザンツ帝国の皇帝権力がどのような状態にあったのか、さらにはビザンツ帝国にとって九世紀前半期とはどのような時代であったのかに関して、明らかにしていくことが可能になる。また同時に、筆者が以前分析を行った九世紀後半の動向^⑫とあわせて、九世紀のビザンツ社会や政治構造の一端を垣間見ることができるとは違いない。

- ① cf. J. B. Bury, *A History of the Eastern Roman Empire: from the fall of Irene to the accession of Basil I* (CA. D. 802-867), London, 1912, pp. 120-125; J. Rosser, "THEOPHILUS (829-842): Popular Sovereign, Hated Persecutor", *Byzantika* 3 (1983), pp. 37-56, pp. 43-45.
- ② J. B. Bury, op. cit.
- ③ J. Rosser, op. cit.
- ④ W. T. Treadgold, *The Byzantine Revival 780-842*, Stanford, 1988 (以下、Treadgold 文註)。
- ⑤ Theophanes Confessor, *Chronographia*, Leipzig, 1883 (以下、Theoph. 文註)。
- ⑥ Georgius Monachus, *Chronicon*, Leipzig, 1904.
- ⑦ Theophanes Continuatus, *Chronographia*, Bonn, 1838 (以下、ThC 文註)。
- ⑧ 『シムメオン年代記』という名称での完全な写本は現存せず、『テ

- オフィシオヌスメリチノヌス年代記』、『メオン・シトラテ・テオロス年代記』各前巻現存(以下、Theodosius Meltetus, *Chronographia*, München, 1859 (以下、ThM 文註)): Leo Grammaticus, *Chronographia*, Bonn, 1842 (以下、LG 文註)。
- ⑨ Joseph Genesis, *Regum libri quatuor*, Berlin, 1978 (以下、Gen. 文註)。
- ⑩ 各年代記の記述に關する問題については R. J. H. Jenkins, "Constantine VIII's Portrait of Michael III", *Bulletin de la Classe des Lettres Sciences morales et Politiques Académie Royale de Belgique 5^e série* XXXIV, 1948, pp. 71-77.; W. T. Treadgold, "The Chronological Accuracy of the Chronicle of Symeon the Logothete for the years 813-845", *DOP* 33 (1979), pp. 154-197.
- ⑪ cf. F. Winkelmann, *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1987 (以下、Winkelmann 文略)。

① 拙稿「ミカエル三世と『従者団』——九世紀中盤ビザンツ帝国の皇

帝と支配構造——『史林』七八—二、一九九五年、三八—七四頁。

二 九世紀初頭までの展開

本章では七世紀から九世紀初頭、ミカエル二世が即位するまでの、皇帝と高官たちの関係や皇帝権力の展開について、簡単な概観を行っていききたい。

ビザンツ帝国の国家体制や社会構造は六世紀後半以降、七世紀から八世紀にかけて大きく変化していった。中央においては中央行政機構の大規模な変革とそれに伴う皇帝への行政責任の集中、またそれに対応する元老院の政治的影響力の低下が起きた。こうした変革は効率的な行政を進める必要のあった当時の情勢によく対応したものであった。同時に皇帝への責任の集中は、皇帝権力の強大化を促した^①。しかしながら八世紀初頭の段階では、恒常的な戦争状態に対応して国家機構の軍事化が進むなか、強力な軍事力を背景とする軍が、中央に対して大きな政治的発言力や影響力をもっており、皇帝を頂点とする中央政府が強力な力を持っていたとはいえない状態にあった。

八世紀の諸皇帝、特にコンスタンティノス五世は地方の軍の持っていた政治的影響力を削減し、中央の影響力を地方に浸透させるべく多くの努力を傾注した。コンスタンティノス五世は中央政府にとって最大の脅威となっていたテマ・オプシキオンを分割して、その政治的影響力や軍事的脅威を軽減させた。また首都に駐屯する、テマからは独立した軍としてタグマタを設置した。タグマタはテマの軍(テマタ)に対する中央政府独自の軍事力という意味をも持っている^②。

こうした改革は地方に対する中央政府の政治的優位を強化するのに大きな効果を上げた。しかしそれは同時に、中央行政機構の中核にある人々——高官・高位保持者たちの政治的影響力を増加させることになった。

年代記や印章などの乏しい資料などから判断すると、彼らは恐らく一貫して行政機構内で経歴を重ねてきた人々であった。そして官位の上昇に応じて、爵位も上昇していった。それゆえ官位と爵位は大体において対応関係になり、高官たち

は高い爵位をも同時に保持していることが多かった。つまり中央にいる高位保持者たちのほとんどは高官であった。彼らは行政機構内で経歴を重ねる間に皇帝の知遇を受けて登用され、政治的影響力をも高めていった人々である。それゆえ彼らの政治的影響力の源泉は皇帝権力にあった^④。そして八世紀の間に、地方に対する中央の優位が確立して中央行政機構の力が高まるにつれ、高官や高位保持者たちは次第に政治的影響力を拡大させていく。彼らは八世紀末までに社会的なまとまりを形成していき、何代も連続して高官職につく家系が出現する。八世紀末頃から家門名をもつ高官たちが出現することとは、そうした傾向の証左である。

ただし彼らは皇帝権力から完全に独立した存在だったのではない。彼らの政治的影響力の基盤は皇帝から授与された官位や爵位であり、経済的基盤も国家からの年俸や皇帝からの贈与に大きく依存していた。彼らが皇帝を頂点とする中央行政機構に依存しているかぎり、皇帝権力から完全に独立することはできなかったのである。

コンスタンティノス五世が没した七七五年以降、ビザンツ帝国の政情は次第に不安定になっていく。高官や高位保持者たちの政治的影響力は、この動播期に次第に拡大していった。九世紀初頭のニケフォロス一世（在位八〇二—八一一一年）とミカエル一世ランガベ（在位八一—八一三年）の即位は、中央の高官たちが主導する宮廷クーデターによって達成されている。これは、九世紀初頭までに中央の高官たちの政治的影響力が、帝位を左右するまでに強大化していたことを示している^⑤。一方ニケフォロス一世の即位に反対し、小アジアの大半のテマの軍事力を糾合して起こされたバルダネス・トルコススの反乱（八〇三年）^⑥があえなく失敗に終わったことは、地方に対する中央の優位の確立を如実に示している。

テマ・アナトリコンのストラテゴスからミカエル一世に替わって帝位についたレオン五世（在位八一三—八二〇年）は、前政権を支えていたドメステイコス・トーン・スコロンのステファノスと、マギストロスのテオクティストスを政権の中枢から外す^⑦。しかしながら彼ら以外に、レオン五世の即位に伴って地位を失った人物は資料からは確認できない。資料が少ないうえに、レオン五世の即位に際して大きなメンバーの変化が起きたことは看取できない。

恐らくレオン五世は高官や高位保持者たちの政治的影響力に阻まれて、彼独自の政局運営を行うことができていなかった。彼が八一五年に再開したイコノクラスムに対して、多くの高官や高位保持者たちが反対の態度を示していたことが、イコン崇拜派の修道士テオドロス・ストゥディテスの書簡や伝記からうかがえる。レオン五世の支持基盤はきわめて脆弱だった。

レオン五世と高位保持者・高官との関係については興味深いエピソードが伝えられている。それによると、レオン五世が自らの信任する聖職者であったヨハネス・グラマティコスをコンスタンティノール総大主教に任じようとした際、彼の若さと「生まれの高貴さ」の点で「パトリキオスたち」が彼の任命に激しく抵抗したため、任命を断念せざるを得なかったといふ^④。ここから高位保持者・高官たちのもつ影響力の大きさがうかがえる。また同時に、彼らが一致した行動を起こしうる社会的まとまりを形成していたことをも確認できる。

以上要するに、九世紀初頭までには、地方に対する中央の優位が次第に確立していった。だが、それに伴って中央行政機構の高官・高位保持者たちが徐々に政治的影響力を拡大していき、九世紀初頭にはその力はいはや無視できぬものままで成長していた。特に八世紀末から九世紀初頭にかけての時期のように、政情が不安定で皇帝が頻繁に交替した時期には、高官や高位保持者たちの政治的影響力は政権の帰趨を左右するまでに拡大していたのである。

① J. F. Haldon, *Byzantium in the seventh century: the transformation of a culture*, Cambridge, 1990 (以下「Byzantium」略), pp. 173-207, 376-402.

② J. F. Haldon, *Byzantine Praetorians: An Administrative, Institutional, and Social survey of the Opsition and Tagmata, c. 580-900*, Bonn, 1984 (以下「Haldon」略), pp. 205-235.

③ たたし七世紀から八世紀前半にかけては「爵位が低いのに高い官位をもちつづける人物の例も看取われる」F. Winkelmann, *Byzantinische*

Rang- und Amtsstruktur im 8. und 9. Jahrhundert: Faktoren und Tendenzen ihrer Entwicklung, Berlin, 1985, S. 45-61.

④ Byzantium, pp. 160-172.

⑤ 八〜九世紀の高官や高位保持者たちの経済的基盤に関しては資料がきわめて断片的で、包括的な研究はまたなされていなく、さしあたりF. Winkelmann, S. 25-32, 参照。

⑥ Theoph., pp. 476-479, 492-493; cf. 中谷功治「八世紀後半のビザンツ帝国——ヒイレーネー政権の性格をめぐって——」『西洋史学』

一七四、一九九四年、三六一—五三頁。

① Theoph. 476-480.

② Treadgold, p. 198.

③ I. Ševčenko, "Was there totalitarianism in Byzantium? : Constantinople's control over its Asiatic hinterland in the early ninth century", in: C. Mango & G. Dagron (eds.), *Constantinople*

and its Hinterland, Aldershot, 1995, pp. 91-105. テオドロス・スト

パトモスの書簡集 G. Fatouros (ed.), *Theodorī Studitae Epistolae*,

2 vols, Berlin, 1991. 伝記集 *Vita Theodorī Studitae*, in: PG 99,

1903, c. 113-328.

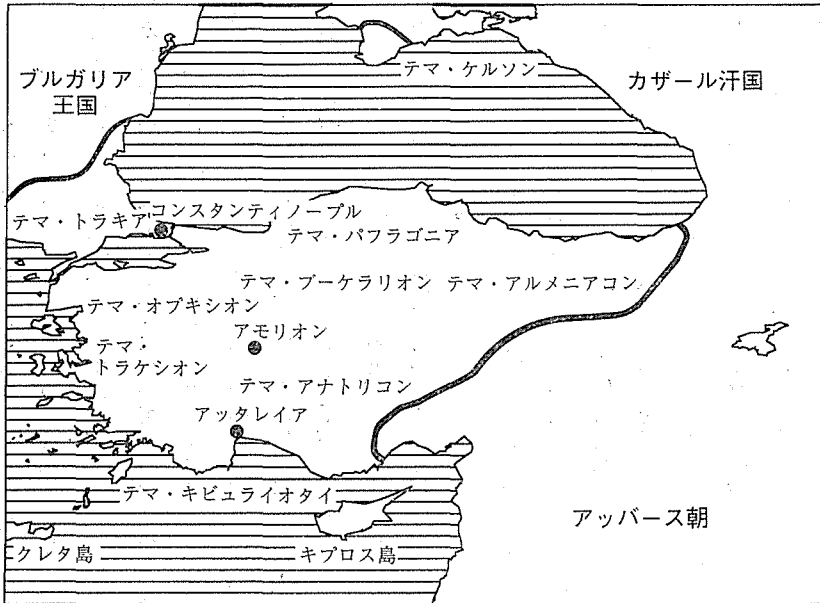
④ *Scriptores inuentus de Leone Armenio*, Bonn, 1842, p. 359.

三 ミカエル二世の政権

本章ではミカエル二世時代の皇帝と皇帝権力をめぐる状況について検討していく。ミカエル二世やその治世については、考慮すべき点がいくつかある。まず彼の経歴や社会的背景を考察していかなければならない。そうした要素はミカエル二世と高官たちとの関係にも大きく影響するからである。またミカエル二世の時代には延べ三年に及ぶ大反乱、いわゆるスラヴ人トマス（八二一—八二四年）がおきている。この反乱の与えた影響についても考察を行っていく。さらにミカエル二世の時代以降、シチリア島やクレタ島がムスリムによって攻略されていく。こうした対外情勢の変化の影響についても、あわせて考察する必要がある。

ミカエルはゲオルギオス①なる人物の子として、七七〇年頃に小アジア中央部の都市アモリオンで生まれた②。『続テオファネス年代記』などでは、ミカエルは若い頃貧窮にあえいでいたとされている。だがこの記述は信憑性に乏しい。というのも彼は青年期以降一貫してアナトリコンの幹部として経歴を重ねており、アナトリコンのストラテーターゴスの娘と結婚するまでになっているからである。④ J・F・ハルドンによると、八世紀後半にはテマの将校になれるのは、それ以前から比較的高い社会的地位にあった人々に限られるようになり、下賤な階層の人間が将校になれる可能性はきわめて低くなっていた。例えば元来貧民であるヨアンニキオスという人物は、二〇年にわたって兵士を務めたにも関わらず、昇進すること

地図 ミカエル2世・テオフィロス時代の帝国東部



太線：国境 ゴシック：国名 ●：都市名

はなかった^⑤。反対にテマの将校の一族だった人物が急速に昇進していく例は、かなり多く看取できる^⑥。また『続テオフィルス年代記』にも、ミカエルがアナトリコンの軍に入隊した際には既にミカエルの一族の者がストラテーゴスの幕僚に参加していたという記述がある^⑦。ミカエルは全く困窮した一族の出身ではなく、比較的高い社会的背景を持って生まれた人物であると考えるべきである。トレッドゴールドも、ミカエルの父はある程度の財産を持っていた軍の幹部であったと論じ、『続テオフィルス年代記』の記述は強調され過ぎていると断じている^⑧。

ミカエルはレオン五世とは古くからの友人であった。レオンがアナトリコンのストラテーゴスになるとその側近となり、レオンの即位の際にもためらうレオンに即位を迫っている^⑨。そしてレオン五世の即位によって、ドメスタグコス・トーン・エクスクビトーンに任命された。しかしミカエルは次第にレオンと対立していく。『シユメオン年代記』や『続テオフィルス年代記』、『ゲネシオス年代記』などによると、ミカエルは皇帝に対する反感を公言していることを知ったレオン五世によって八二

○年のクリスマス・イブにとらえられ、投獄された。しかしそれに対してミカエルは獄中から自らの支持者に指示を与え、その翌日、クリスマスの早朝ミサのために宮廷内の教会を訪れたレオン五世をミカエルの支持者たちが襲撃し、暗殺した。そしてミカエルが皇帝に即位するのである。^④

レオン五世暗殺に関与した人々について検討を加えていきたい。『シュメオン年代記』や『続テオフアネス年代記』などによると、宦官のテオクティストスおよびミカエルの一族のペピアス^{宦官の宦官}が、獄中にあったミカエルと支持者たちとの間の連絡を担当した。また実際にレオン五世を暗殺した人々としてクランボニテスなる者の名があげられている。クランボニテスら、暗殺の実行部隊の人々がどのような地位にあった人々であるかは、レオン五世暗殺を伝える資料からは明確ではない。しかしながら資料の他の部分から、手がかりを得ることができる。

『シュメオン年代記』などによると、ミカエル二世が没してテオフィロスが即位するとすぐに、テオフィロスはレオン五世の暗殺を実行した人々の処遇について元老院に諮問した。そして元老院が彼らの処刑を決定したため、彼らはヒッポドロームで処刑された。^⑤

七世紀の混乱の結果、古代末期まで存在していた元老院貴族層が崩壊し、元老院は中央の高官や高位保持者たちによって組成されるようになっていた。それゆえレオン五世の暗殺者たちの処遇について元老院が関与していたことから、レオン五世の暗殺者たちの中に高官や高位保持者たち、あるいはその一族が含まれていたことが看取できる。レオン五世がミカエルの言動に警戒心を抱き、ミカエルを処刑すべく捕らえたのも、レオン五世と対立していたのがミカエル単独ではなく、ミカエルを支持する人々が政府中枢にも存在しており、その影響力が無視できないものになっていたからであろう。以上要するに、ミカエル二世はレオン五世の治世から中央政府の高位保持者・高官たちの中にながりの支持者を持つていた。そしてミカエルの勢力が拡大していくのを恐れたレオン五世との対立の結果、ミカエルの支持者がレオン五世を暗殺し、ミカエルを即位させたのである。すなわちレオン五世の暗殺とミカエル二世の即位は中央政府内での対立に起因す

表 9世紀前半における官位・爵位の序列

①官位	
エバルコス	首都長官
サケラリオス	総務長官
ロゴテテース・トゥー・ゲニター	税務長官
クアイストル	司法長官
ロゴテテース・トゥー・ストラティオティクター	軍隊財務長官
ロゴテテース・トゥー・ドゥロムー	通信・外務長官
ロゴテテース・トーン・アゲローン	皇帝領管理長官
カルトゥラリオス・トゥー・サケリウー	財務長官
カルトゥラリオス・トゥー・ベスティアリウー	貨幣鑄造・輜重長官
オルファノトロボス	孤児院管理長官
エビ・トゥー・カニクレイウー	皇帝のインク壺管理長官
プロトストラトル	皇帝乗馬時の隨身
プロトアセクレティス	尚書長官
エビ・トゥー・エイディクター	貯蔵物資管理長官
	（以下省略）
<p>☆文官のみを掲示。テマやタグマの長官，宦官の役職は省略した。</p> <p>☆プロトスパタリオス以上の爵位を持った人物が就任することの多い役職を示した。ただし爵位と官位の間に，明確な対応関係が必ずしもあるわけではない。</p>	
②爵位	
1. カイサル	
2. ノベリッシモス	
3. クロバラテス	
4. ゾステ・パトリキア（女性の爵位）	
5. マギストロス	
6. アンテュパトス（テオフィロス時代に新設）	
7. パトリキオス	
8. プロトスパタリオス	
9. スパタロカンディダトス	
10. ディシュパトス	
11. スパタリオス	
12. ヒュパトス	
13. ストラトル	
14. カンディダトス	
	（以下省略）
<p>☆9世紀前半には爵位の序列は（特に中位以下は）なお流動的であった。</p> <p>☆プロトスパタリオス以上が元老院議員に相当する爵位。</p>	

る、一種の宮廷クーデターであったと理解できる。

しかしながら、このような通常ではない政權交代が行われたにもかかわらず、中央政府内で大規模な人員・役職の移動がおきていたことは看取できない。レオン五世の暗殺に際してその地位を失った人物としては、ミカエル二世の即位を公然と批判したレオンの甥のグレゴリオスⅡプロトスガ確認できるのみである。テオクティストスⅡブリュエニオスのように、レオン五世の一族ですらその後も高い地位を享受している者がいる^⑭。資料が少ないため、大規模な人員の移動が行われなかった理由を確言することはできないが、以下のような点が指摘できるだろう。第一に、前章で示唆したようにレオン五世はすでに高官・高位保持者たちの大半の支持を失っていた可能性が高い。またトマスの反乱の影響も考えられる。すなわち小アジアの大半の兵力と海軍力をもって首都やトラキアに攻撃を行ってきたトマスに対抗するため、高官や高位保持者たちとの融和を維持する必要があった、と考えられるのである。

しかしこの時期、中央の高官や高位保持者たちの構成が安定したものになっていたことは明らかである。トレッドゴードにも紹介している以下の二例はそれを如実に示している。一人目はヨハネスⅡヘクサブリオスなる人物である。彼は元来ミカエル一世時代にコンスタンティノープルの城壁防衛長官を務め、皇帝にレオンの反抗を予想・警告していた人物であるが、レオン五世時代にはレオン五世の側近となっていた。そしてミカエルを内偵して皇帝に報告し、ミカエルを逮捕・投獄した。しかし彼はミカエル二世時代にもその地位を失うことなく、トマスの乱後処理で大きな役割をはたしている。二例目としてはサケラリオス^{総務長官}を務めていたレオンという人物があげられる。彼は八〇二年のニケフォロス一世のクーデターの参加者の一人である。彼はイコン崇拜者であったがイコノクラストのレオン五世・ミカエル二世・テオフィロスの治世を通じてその地位を維持していた。このような例から、この時期の高官・高位保持者たちが頻繁な政權交代や政策の变换にもかかわらず、安定した構成を維持していたことが看取できる。これは高官・高位保持者たちが安定した集団として、のまとまりを保持していたことを示している。九世紀初頭の皇帝は高官や高位保持者たちの行動や対応を全く無視して、

政権を維持することはできなかったのである。^⑥

『続テオフィネス年代記』によると、ミカエル二世は最初の妃をなくした後、しばらく独身を通していたが、元老院のかなり強硬な勧告によって、再婚することに同意したという。^⑦これは、ミカエル二世の時代に高官や高位保持者たちが、皇帝に対して強硬な意見を主張できるほど大きな発言力を持っていたことを示すものであり、先にあげたレオン五世と「パトリキオスたち」との関係をめぐる逸話とともに、皇帝の政治的発言力がかなり制限されていた可能性を示唆している。

次にミカエル二世の治世後半の展開について考察を行っていきたい。

八二四年、トマスはトラキアで降伏し、三年に及ぶ大反乱はようやく終結した。トマスはアナトリコンを始めとする小アジアのテマの陸軍力の多くや、テマ・キビュライオタイなどの海軍力をも結集してコンスタンティノープルの攻略を企てた。それゆえ反乱終息後はテマの指導層の再編が不可欠となった。^⑧

また八二六年以降、シチリア島やクレタ島にムスリム勢力が侵入を開始した。特にクレタ島の失陥は帝国に深刻な影響を及ぼした。クレタ島がムスリムの手に落ちることによって、エーゲ海の諸島のみならず小アジアやバルカン半島の沿岸地域がムスリムの度重なる攻撃を受け、大きな被害を受けるようになったからである。^⑨このような状況下、ミカエル二世は信頼できる有能な人物にテマを委ねる必要性に迫られていた。

小アジアの陸海軍に対するミカエル二世の施策の一端を明らかにしてくれる例として、テマ・キビュライオタイのストラテゴス任命の経過をあげたい。テマ・キビュライオタイはトマスの海軍力の中核であった。またそれと同時にテマ・キビュライオタイはクレタ島の対岸に位置し、対ムスリムの最前線でもあった。すなわちミカエル二世にとっては最も注意を傾倒しなければならないテマであった。

トマスの乱が終息した時にキビュライオタイを統括していたのは、トマスの乱の際に一貫してミカエル二世側に立って

ストラテゴス代行

行動していたエク・プロソプリーのヨハネス・エキモスであった。恐らく彼はクレタ島へのムスリム侵入が始まった時期にはキビュライオタイのストラテゴスを務めていたが、突然修道生活に入る。その後キビュライオタイのストラテゴスとなったのはフォティノスなる人物である。

フォティノスは年代記者テオフアネスの一族である。この一族にはテオフアネスの父や一〇世紀初頭のヒメリオスなど、海将として活躍した人物が多い。フォティノスも恐らく海軍を中心に経歴を重ねた軍人であったのだろう。フォティノスは『統テオフアネス年代記』によるとミカエル二世の信頼の厚い將軍であり、トマスの乱後にアナトリコンのストラテゴスに任命されていた。フォティノスはキビュライオタイのストラテゴスに任命されるとクレタ島を奪回すべくムスリムに対して出撃したが敗北する。しかし彼はその後、ムスリム勢力の攻撃に同じくさらされていたテマ・シチリアのストラテゴスに転任して、ムスリムと戦い続けている。

フォティノスの後にキビュライオタイのストラテゴスに任命されたのは、クラテロスである。彼は恐らくレオン五世時代に、アナトリコンのストラテゴスを務めていた。クラテロスはキビュライオタイのストラテゴスに任命されるとクレタに対して出撃したが、ムスリムに敗れて戦死している。

その後対クレタ艦隊の指揮を行ったのはオオリュファスなる人物である。彼は『統テオフアネス年代記』には「軍隊経験のある人物」とあり、軍隊で経歴を重ねていた人物であることがわかる。彼が指揮していた艦隊はテマ・キビュライオタイの艦隊ではなく、新たに組織された艦隊である可能性が高いが、いずれにせよ皇帝の信任を受けて重大な任務を委ねられた將軍である。但し彼が艦隊を指揮していたのは、ビザンツの年代記が述べているようなミカエル二世治世ではなく、E・マラムートが示唆しているようにテオフィロスの治世の最初期である可能性が高い。彼は部分的な成功を収めるものの、クレタ島を奪回することはできなかった。

小アジアの陸のテマのストラテゴスに任命された人物については情報が少ない。最大のテマでありトマスの乱の中心

となったアナトリコンには、先述したフォティノスが任命されている。彼がキビュライオタイのストラテীগスに転戦した後は恐らく、レオン五世時代にもアナトリコンのストラテীগスを務めていたマヌエルが再任された。エーゲ海沿岸部のテマ・トラケンオンでは、ミカエル二世の治世末期にはコンスタンティノスⅡコントミュテスがストラテীগスを務めていた^⑤。トラケンオンは小アジアで最も生産力の高い地域であると同時に、クレタに根拠を置いたムスリム勢力の攻撃を激しく受けた地域でもある。後にシチリアのストラテীগスに転じていることなども考え合わせると、彼もフォティノスと同様に皇帝の信任の厚い人物であったろうと推測される。

こうした情報から確認できることがある。すなわちストラテীগスなどに任命された人々の多くがミカエル二世と同様の社会的背景を持った人々だったことである。これまで分析してきたように、ミカエル二世は小アジアのテマの將校出身で、その出自もこれまで考えられていたほど低いわけではない。ここで取り上げた人々も同様である。たとえば次章で触れるように、マヌエルはバフラゴニアに所領を持つテマの將校の一門の出身である。オオリュファスもストラテীগスに任命される前から軍隊内で経歴を重ねてきた人物であった。

最も特徴的なのはヨハネスⅡエキモスである。彼はパレスティナの裕福な家出身の人物であるが、青年期にテマ・キビュライオタイの中心であるアッタレイアに移住してきた。そしてその地の軍司令官の目に留まって引き立てられ、エク・プロソプーに任じられるのである。そしてトマスの乱後には皇帝ミカエル二世の信任を受けることになる。富裕な家の出身であり、テマ・キビュライオタイの將校として勤務し、最終的に皇帝の信任を受けるようになったという彼の経歴は、他の人物たちにも当てはまるだろう^⑥。

要するに、ミカエル二世はテマのストラテীগスなどの地方の要職には自らと同様の社会的背景を持った人々を登用していることがわかる。彼らは皇帝に忠実で、皇帝の厚い信任を受けた人々であった。また逆に彼らの観点から見れば、自分たちと出自を同じくする皇帝は、自分たちの利害を代表する存在でもあった。

本章での考察を簡単に小括しておきたい。

ミカエル二世は小アジアのテマの將校出身であり、従来考えられてきたほど低い出自の人物ではなかった。しかし彼が皇帝であった九世紀初頭までには、中央政府内で高い地位を占める高官や高位保持者たちが大きな政治的影響力を行使するとともに、安定した階層的なまとまりをなすようになっていた。ミカエル二世も彼らの支持なくして帝位につくことはできなかったし、彼らの影響力を無視して国政を運営していくこともできなかった。

その一方で、ミカエル二世はテマのストラテゴスに自分たちと同様の社会的背景を持つ人々、すなわちテマの將校たちを積極的に登用した。新たに登用された人々にとって、皇帝は自分たちの利害を代表する存在であり、それゆえに皇帝にとっても信任できる存在たりえたのである。

ミカエル二世の支持基盤となっていた軍事力は、首都の高官や高位保持者に対抗して政権を維持していく上で、大きな力になった。しかし軍事力のみでは不十分であった。ミカエル二世は高官や高位保持者たちに対して、強力な統制力を発揮することはついにできなかったのである。

- ① *The History of al-Tabari vol. 32: The Reunification of the Abasid Caliphate*, Albany, 1987, p. 45, 144.
- ② Treadgold, p. 225.
- ③ ThC p. 44.
- ④ ThC pp. 44-45, Gen. pp. 22-23.
- ⑤ *Vita Sancti Ioannici*, in: *ANSS* Nov. II-1, pp. 334-335, 337-338.
- ⑥ Haldon, pp. 328-337.
- ⑦ ThC p. 44: cf. Gen. p. 22.
- ⑧ Treadgold, p. 225.
- ⑨ ThC pp. 16-17, Gen. p. 4.
- ⑩ ThC pp. 33-40, Gen. pp. 15-21, ThM pp. 144-145, LG pp. 210-211.
- ⑪ ThC pp. 84-86, Gen. p. 36, ThM pp. 147-148, LG pp. 214-215.
- ⑫ *Byzantium*, pp. 387-394.
- ⑬ ThC pp. 57-58, Gen. p. 27.
- ⑭ ナオクヤントス・ソフリア・エノロンはレオン五世の甥。またソルマ・ネストラン・コンの子の可能性が高い。彼はミカエル二世時代に亡くなったテマのストラテゴス。またテオファノス時代にはテオ・ペロ・ネンズのキタキエ・トクた。⑮ *Vita Sancti Ioannici*, p. 347 A-B, 392 B-393 B.: *Theodoros Studite Epistulae*, no. 509.: *Constantinus Porphyrogenitus, De Administrando Imperio*, Washington D. C.,

1967, ch. 50.

⑩ Treadgold, p. 343. : cf. Winkelmann, S. 117.

⑪ ThC pp. 78-79.

⑫ ThC pd. 53-54, Gen. pp. 23-24.

⑬ E. Malamut, *Les Iles de l'Empire Byzantin*, Paris, 1988 (イール・マラムツ 著), pp. 72-88.

⑭ *Vita Sancti Antonii Junioris*, in: *Pravoslavni Palatinskiy Sbornik* 19-3 (1907), pp. 186-216, pp. 194-202.

⑮ M. W. Herlong, *Kinship and Social Mobility in Byzantium*

717-959, Ph. D. thesis of Catholic University in America, Washington D. C., 1986, pp. 102-108.

⑯ ThC pp. 76-77. : cf. Herlong, op. cit., pp. 102-108.

⑰ ThC pp. 79-81, *Vita Sancti Theodori Studitae*, c. 296 B.

⑱ ThC p. 81, Gen. p. 35.

⑲ Malamut, pp. 72-78.

⑳ ThC p. 137, 175.

㉑ *Vita Sancti Antonii Junioris*, pp. 187-188, 193-196.

四 テオフィロス時代の皇帝権力

第一章で簡単に触れたように、テオフィロスが高官や高位保持者たちを完全に掌握しながら強力な指導力を発揮していることが年代記等から看取できる。このような状況はテオフィロス時代とそれ以前の時代との大きな差異となっている。しかしそのような状態が、なにゆえ出現したのであろうか。本章ではテオフィロスが強大な指導力を発揮することができた要因を、中心的に考察していくことになる。その際従来はテオフィロスの「公正さ」を強調する際に利用されることのできた資料等も再検討しつつ分析を行っていく必要がある。

考察をすすめるにあたって、中心的な問題となるのは高官や高位保持者たちとの関係である。だがビザンツ帝国の政情には、軍隊も大きな役割を果たしていた。特に前章で分析したように、ミカエル二世はテマの幹部出身であって、軍との関わりが特に深かった。それゆえテオフィロスの時代の政治構造を分析するにあたって、軍隊との関係を無視することはできない。またヨハネス・グラマティコスのような教会関係者などとの関係も等閑視することはできない。それゆえ本章では、テオフィロスと、テオフィロスの周囲にいた人々との人間関係について、高官・高位保持者たちとの関係を中心

に据えつつも、それ以外の人々にまで視野を広げつつ分析を行っていくことになる。

(一) 高官・官僚機構との関係

本節では、前代から引き継いだ強力な政治的影響力をもつ高官・高位保持者たちに対して、テオフィロスがどのように対応していたかについて検討していく。

前章でも触れたが、テオフィロスは即位するとすぐに、元老院議員を集めて裁判を行い、ミカエル二世と通じてレオン五世を暗殺した者たちを処刑している。これは前章でも分析しているように、レオン五世を暗殺した者たちが高い身分の人々であったことを示唆している。だが同時に、皇帝と高官・高位保持者たちの関係をみる上でも興味深い。すなわち高官・高位保持者たちに関係する事項の処理に際しては、皇帝の独断ではなく、高官たちとの協議の上、処理が行われる形をとっていることが看取できるのである。

この措置はテオフィロスの皇帝としての存在理由を危うくしかねない行動であった。それは処刑される直前に、「我が陛下の父君に加担していなかったら、現在の陛下の地位はなかったのです。」と処刑された者たちが言ったとする『シュメオン年代記』の記述^①に端的に現れている。しかしながらこの措置をとることによって、テオフィロスは父のミカエル二世や自らに対して向けられていた、クーデターによって帝位についた非合法な皇帝という批判を和らげ、高官たちの支持を強固にすることができた。この措置はトレッドゴールドら多くの研究者によって指摘されているように、テオフィロスの権力基盤を強化することになったのである。^②

この事件からもうかがえるが、テオフィロスは元老院議員を尊重する態度を日頃から示していたようであり、年代記にそのことを示す逸話が他にも語られている。^③ また彼は没する際、枕元に帝国の主だった人々すべてを呼び、後事を託している。^④ こうした行動をとった皇帝は少なくとも七世紀以降には全くいない。テオフィロスが常に高官たちや高位保持者た

ちを尊重しながら対応していたことを示す好例と言えよう。

またテオフィロスが国政の実務に積極的に関与していたことも、高官たちとの関係を考える上で無視できない。先述したようにテオフィロスは毎週マグナウラ宮殿に赴いて自ら裁判を主宰した。さらにその道中、テオフィロスは気軽に一般の人々からの訴えを取り上げ、適切な措置を官僚や高官たちに命じてとらせている。^⑤ これほどまで積極的に行政に関与した皇帝はビザンツ帝国史上でも珍しい。こうした行動は彼が公正であるという評価を高めた要因であるが、このことは同時にテオフィロスが官僚や高官たちと積極的に関係・協議しつつ国政を執行していたことを意味する。事実彼の時代には、高官のみならず比較的序列の低い官僚や軍人までがテオフィロスから直接命を受けて政治に関与する例が比較的多く看取できる。^⑥ 例えばスパタロカンディダトスのペトロナス・カマテロスは、黒海北岸のカザール汗国に派遣され、その功でプロトスパリオスに昇格している。^⑦ またイコン崇拜派に対する弾圧に際しては、宦官と並んで^⑧ 中位の官僚たちが盛んに利用されている。^⑨ さらにテオフィロスは娯楽活動を盛んに行っている。^⑩ また演劇に対しても深い興味を示していたようである。彼は学問や建築活動にも深く興味を見いだした。ヨハネス・グラマティコス^⑪の従兄弟であったレオン・マテマティコスがマグナウラ宮殿で高等教育を開始したのも、テオフィロスの命によってである。^⑫ その結果テオフィロスの時代には、高官はもちろんのこと、中堅官僚層などまでもが皇帝と直接接触することが特に多かつたと想像できる。そしてそれは、皇帝との間に親密な人間関係を形成する可能性が高まることを意味する。テオフィロスは彼に先行する皇帝よりも広範な人間関係のネットワークを形成していたといえよう。

同様の行動は、別稿で明らかにしたようにテオフィロスの子のミカエル三世も行っている。ミカエル三世を支持する勢力の中核は高官のみならず中堅官僚層にまで広がっていた。ミカエル三世時代と同様、テオフィロスもまた高官たちのみならず中堅官僚層にまで親密な支持者を形成していたのである。ミカエル三世が中堅官僚たちと親密な人間関係を形成する際に活用したのは、競馬や宴会などの娯楽であった。^⑬ ミカエル三世の行動も、恐らく父のテオフィロスに範をとっての

ものであろう。

以上要するに、テオフィロスは高官たちを尊重しつつ政治を行う姿勢を示すことによって、高官たちの支持を巧みに獲得していた。また積極的に国政に参画したり、娯楽や文化活動、建築活動などにも精神的に関与することによって、高官や高位保持者のみならず官僚機構のかなり広い範囲に、皇帝と親密な人間関係を持った人々を持つにいたっていた。それが彼の権力基盤を支える人的資源となっていたのである。

だがテオフィロスがとった行動は、こうした点にとどまるものではない。テオフィロスは高官や高位保持者たちに対する皇帝の優位を確立するために、さらに積極的な方策をもとっていたのである。

(二) 軍事力の掌握

テオフィロスの政権を強力に支えていた要因として看過できない要素がある。軍事力である。本節ではテオフィロスと軍隊との関係について、分析を行っていく。

前章で検討したように、ミカエル二世は小アジアのテマの幹部出身であると同時に、レオン五世時代にはドメステイコス・トーン・エクスクビトーンとしてタグマタとも深い関係を持っていた。それゆえ軍隊に対しては皇帝の影響力は強力であった。

首都に駐屯する陸軍であるタグマタはテオフィロスの時代以降、次第に帝国の陸軍の中核をなす精鋭部隊としての役割を強め、ドメステイコス・トーン・スコローンはビザンツ陸軍の総司令官としての役割を強めていく。テオフィロス時代のドメステイコス・トーン・スコローンにはマヌエルが任命されている。彼は次節で詳しく検討するように皇后のテオドラの伯父であり、テオフィロスの最も信頼する側近の一人であった。テオフィロスはマヌエルの子たちが洗礼を受ける際、その代父となっている^⑬。別稿でも触れたように、ビザンツ帝国においては洗礼の代父になることによって擬制的な血縁関

係が形成され、強力な親密さの要因になることが多かった^⑩。テオフィロスをとつたこの行動は、マヌエルとの親密な関係を傍証している。また同時に、テオフィロスがさまざまな手段を行使してネットワークを構築しようとしていたことをも示している。

また地方に駐屯するテマのストラテーターゴスなどの幹部たちとも親密な関係を結んでいた。前章で検討したような、かつてはミカエル二世の同僚であった人々がこの時期にはなおテマのストラテーターゴスやテママルケス^{テマ次官}として残っており、テオフィロスの強力な支持基盤となっていた^⑪。そればかりではなく、トゥルマルケスとなつたカリストス・メリッセノスのように、テオフィロスに認められて登用された人物もいた^⑫。テマの幹部たちはテオフィロスの時代にも皇帝の強力な支持基盤であつたと考えられる。

海軍についてはテオフィロスの時代に関しては資料がなく、確実なことは言えない。しかし恐らくテオフィロスの時代に、地中海の情勢の変化に対応して中央艦隊が新設された。これは前章で言及した、対クレタ遠征のために新設された艦隊が中核となつただろう。先述したように、オオリュファスがテオフィロス時代の初期に対クレタ艦隊を率いていた。中央艦隊の長官であるドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーに誰が任命されていたかは確言できないものの、テオフィロス治世の初期にオオリュファスがその任にあつた可能性は高い。彼はテオフィロスの治世末にはドゥルンガリオス・テラス・ビグラス^{長官}に就任していた。そしてアッバース朝から投降してきたベルシア人部隊の長官であり、テオフィロスによって登用された人物であるものの不穏な行動を繰り返し、ミカエル三世の帝位継承にとつて障害となつていたテオフィロボスの暗殺に参加している^⑬。彼は明らかにテオフィロスの側近として行動しているのである。オオリュファスはミカエル三世時代の初期には恐らくドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーとして、エジプト遠征などを行っている^⑭。またオオリュファスの一族(恐らく息子)であるニケタス・オオリュファスはミカエル三世時代にエパルコス^{首都長官}、およびドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーを歴任している。すなわちオオリュファス家はテオフィロス時代以降も海軍と深い関わりを持ち続け

ていた^④。

テオフィロスは宮廷内の軍事力をも活用している。例えば宮廷内の軍事力の一角を率いるドゥルンガリオス・テース・ビグラスに任命されていることがわかる三人の人物は、みなテオフィロスの側近たちである。すなわち一人目は皇后テオドラの兄弟であるペトロナス^⑤、二人目はオオリュファスである。三人目はコンスタンティノスⅡマニアケスである。彼はアルメニア出身で、人質としてアルメニアからやってきた時にテオフィロスに認められて登用された。彼は続くミカエル三世時代にも皇帝の側近として行動している^⑥。宮廷内軍事力としてヘタイレリアが設置されたのも恐らくテオフィロス時代である^⑦。

以上から、首都及びその近郊に駐屯する陸海軍、及び地方のテマの指導者たちは、テオフィロスが特に信頼を置く人々によって固められていた可能性が高い。前章で検討したように、テマはミカエル二世の政権の支持基盤であった。さらにテオフィロスの時代には地方のみならず、中央の陸海軍や宮廷内の軍事力もまた皇帝の強力な支持基盤と化していたのである。その結果、テオフィロスは帝国のすべての軍事力を自らの強力な影響下におくことに成功した。この強力な軍事力は、高官や高位保持者たちの行動を制約するのに十分な役割を果たしていた。八三八年にテオフィロスが小アジアでアッバース朝に壊滅的な敗北を喫して、テオフィロスの側近の軍人たちの多くが戦死した際に、一時的に政権が動揺したことがトレッドゴールドによって指摘されている^⑧。この事件は政権維持にとって軍の持つ意味がきわめて大きかったことを示唆している。

(三) 高官・高位保持者たちの構成

資料が少ないため、テオフィロス時代に中央行政機構内の重要な役職に就任していた人物については、わずかなことしか確認できない。しかし幸いなことに、中央行政機構内でも特に重要性が高い二つの重要な役職である、ロゴテテース^{外務}・

トッ通・ドゥ信ロム長とエパルコス官については確認できる人物が比較的多い。

中央行政機構をこの時期事実上統括していたロゴテテース・トッ通・ドゥ信ロム長は、先述したヨハネスⅡヘクサブリオスから、ミュロン②を経てテオクティストスに替わっている。

テオクティストスは前章で言及したように、レオン五世が暗殺された際の共犯者の一人であり、ミカエル二世時代には皇帝のインク壺管理長官エビⅠ・トッ通・カニクレイウ長官を努めていた。こうした経歴から彼はミカエル二世やテオフィロスⅠの最大の側近と考えられる。テオクティストスは八五五年に暗殺されるまで、ロゴテテース・トッ通・ドゥ信ロム長の地位を維持した。③テオクティストスはテオフィロスにとつて、最も信頼のおける最大の側近であった。レオン五世の暗殺に参加した人物の中で、彼のみが何の処罰も受けず、中央行政機構内で最も重要な役職であるロゴテテース・トッ通・ドゥ信ロム長に任じられていることは、テオフィロスから与えられていた信頼の大きさを物語っている。また彼は宦官であり、他の高官や高位保持者たちとは異なる社会的背景を持った人物であった。テオクティストスがロゴテテース・トッ通・ドゥ信ロム長に任じられたことによつて、政府内で他の高官や高位保持者たちが行使できる政治的影響力も制約されただろう。彼がロゴテテース・トッ通・ドゥ信ロム長に任命されたのがかなり遅いことは、彼に対する他の高官や高位保持者たちからの反発がかなり大きかったことを示唆している。事実、後にテオクティストスが暗殺される理由の一つは、高官や高位保持者たちとの対立であった。④エパルコスにはテオドロスⅡミュギアレス(Ⅲミュイアレス)が任じられている。⑤彼もテオフィロス時代に初めて言及される人物である。彼はミカエル三世の時代にエパルコスを務めていたコンスタンティノスⅡミュイアレスの一族と考えられる。また八八六年に、ミカエル三世を暗殺したバシレイオス一世に対する陰謀に参加したミュイアレスも、彼の一族であろう。⑥ミュイアレスの一族はテオフィロス時代からバシレイオス一世時代に言及され、テオフィロスやミカエル三世時代に重要な行政職についた人物を輩出した一方で、バシレイオス一世時代とは対立している。それゆえミュイアレス家はテオフィロスやミカエル三世に深く信頼され、重用された一族であると結論できる。

その他の高官については、サケラリオスはなおレオンが、クアイストル同法長官はエウスタティオス、モノマコスが務めていたことが確認できる。モノマコスは八世紀末から資料に現れる一族である。またテオドラの一族と血縁関係を持っていた可能性がある^④。

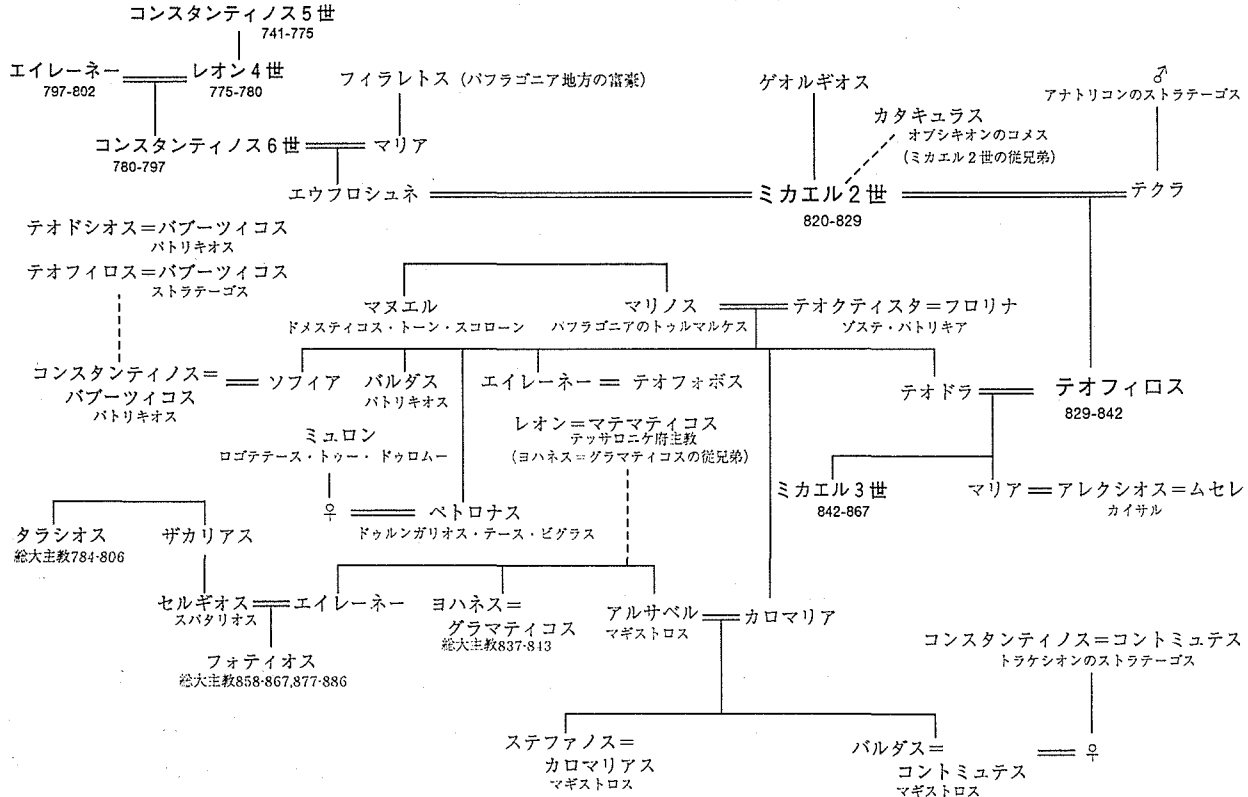
こうしたことから、中央行政機構内でも特に重要性の高い役職については、テオフィロスは自らが特に信頼を置く人物を任じていることが確認できる。ただこういった人事は、一気に行われたものではあるまい。テオフィロスはサケラリオスのレオンのような、前代から高い地位をもっていた人々をも重用している。ロゴテイス・トゥー・ドゥロムへのテオクテイストスの任命が遅くなっているのも、宦官である彼への反発に考慮してのことであろう。しかしその一方で、テオクテイストスのように異質な存在を要職に任じたり、新たな人物を登用したりするなど、きわめて巧みな人材登用を行っているといえよう。

(四) 婚姻関係の形成

テオフィロスの時代に政府内で大きな影響力を持っていた人々の多くに確認できる事実がある。それはテオフィロスの皇后となったテオドラの一族と血縁関係をもっていた人々が多い、という点である。

テオドラはテマ・パフラゴニアのエピサという地の出身である。彼の父のマリノスは恐らくミカエル二世時代にトゥルマルケスを務めていた。レオン五世・ミカエル二世時代にアナトリコンのストラテゴスを務めていたマヌエルはマリノスの兄弟で、テオドラにとっては伯父に当たる。テオドラは花嫁コンクールでテオフィロスの皇后に選ばれた^⑤。このコンクールの候補は、帝国の全土から選ばれている。しかしこの時期何度か行われたコンクールによって皇后に選ばれた女性には例外なく地方の有力家門の出身であり、恐らく候補に選ばれた他の女性たちもみな地方の有力家門の出身者だったろう。テオドラもまた例外ではない。

ミカエル2世・テオフィロス関係系図



ゴシック体は皇帝、数字は在位年、点線は一族関係

テオドラがテオフィロスの皇后となると同時に、テオドラの一族が中央政府内に大量に進出してくる。マヌエルはドメスティコス・トーン・スコロンに就任した。またテオドラの兄弟たちのうち、ペトロナスはドゥルンガリオス・ニース・ビグラスに就任している。バルダスは官職は確認できないものの、テオフィロス時代にテオクティストスとともにアブハジア遠征を行っている。またテオドラの一族であるセルギオス・ニケティアテスもマギストロスとして政権内で重きをなした。^④

注目すべきは、テオドラの姉妹たちの結婚している相手である。テオドラの三人の姉妹たちのうち、カロマリアはヨハネス・グラマティコスの兄弟のアルサベルと結婚している。またアルサベルの姉妹のエイレーネーの夫のセルギオスは八世紀末〜九世紀初頭にコンスタンティノープル総大主教だったタラシオスの一族である。そしてセルギオスとエイレーネーの結婚から、ミカエル三世時代の総大主教フォティオスが生まれている。またカロマリアとアルサベルの間に生まれたバルダスは、ミカエル二世〜テオフィロス時代にトラケシオンやシチリアのストラテゴスであった、先述したコンスタンティノス・コントミュテスの娘と結婚している。^⑤二人目のエイレーネーは先述したテオフォポスと結婚している。^⑥三人目のエイレーネーはコンスタンティノス・パブーツイコスと結婚している。パブーツイコス家もテオフィロス時代に初めて資料に現れる家門である。テオフィロス・パブーツイコスがテオフィロス時代に小アジアのテマのストラテゴスを務めていて、八三八年の対ムスリム戦での敗北の時に捕虜となっている。またテオドシオス・パブーツイコスは八三九年にヴェネツィアとフランク王国に使者として派遣されている。さらに八八六年の陰謀に参加していた者の中にパブーツイコスなる者が確認できる。パブーツイコス家もミュージアレシ家やオオリュファス家と同様、テオフィロスやミカエル三世によって登用され、彼らに忠実な一族であったと考えられる。^⑦

彼女たちは恐らく、みなテオフィロスの治世に結婚している。こうしたことから、テオドラの姉妹たちはテオフィロスによって結婚相手を決定されていると考えられる。テオフィロスはパブーツイコス家やヨハネス・グラマティコスの一族

など、ミカエル二世からテオフィロスの時代に新たに頭角を現してきた一族と婚姻関係を結んでいる。またそうした一族からさらに婚姻関係が広がっていることも確認できる。すなわちテオフィロスは皇后のテオドラの一族を利用して、自らが信を置いている人々と活発に婚姻関係を結んでいるのである。

そのほか、前節で言及したようにクアイストルを務めていたエウスタテイオス・モノマコスも、テオドラの一族との血縁関係があった可能性がある。

一方テオフィロスと直接血縁関係を持っていた人物はあまり多くない。テオフィロスの娘のマリアがアレクシオス・ムセレと結婚しているのが確認できる唯一の例である。同名の人物が八世紀末や一〇世紀前半にも高い地位を持った人物として資料に現れる。ムセレ家は八世紀末から一〇世紀にかけて重要な地位を歴任した一族であったと考えられる。アレクシオス・ムセレはミカエル三世が八四〇年に産まれるまでテオフィロスの後継者と目され、カイサル位を持っていた。^⑧

また先述したようにテオフィロスがマヌエルの子たちの洗礼の代父となっていることは、テオフィロスとの擬制的な血縁関係を形成させ、テオドラの一族との結びつきを強化しただろう。

本節での考察から、テオドラの一族を結節点として血縁関係を媒介とした親族関係のネットワークが形成されていることが確認できる。テオドラの一族を通じて皇帝一門やバブリーツィオス家、コントミヌテス家、総大主教ヨハネス・グラマティコス（一）の一族、フォティオスの一族などが結びつき、広範な「皇帝一門」を形成している。こうしたネットワークは無論偶然に形成されたものではなく、意図的に形成されたものであろう。

こうした結びつきの多くが、バブリーツィオス家のようにテマのストラテゴスなどを歴任している一門に向けられていることは特徴的である。彼らは前章で詳しく分析したように、テマの幹部出身の一門であり、皇帝と同様の社会的背景を持った人々であった。すなわち親族関係のネットワークは、小アジアのテマ幹部出身者たちによって支えられた政権を強化するために、効果的に利用されていたのである。またマヌエルの子らに対してのテオフィロスの行動のように、擬制的

な血縁関係も駆使されている。

親族関係のネットワークは小アジアのテマ幹部出身者に対してのみではなく、中央の家門とも形成されている。しかしヨハネス・グラマティコスの一族に特徴的なように、ネットワークが形成されている家門はミカエル二世・テオフィロス時代に影響力を持つようになる一族が中心である。すなわちミカエル二世やテオフィロスによって登用された新興勢力が中心であり、既存の高官たちの勢力たちとは一線を画する、皇帝に忠実な新たな集団の中央政府内での強化に大きく資したのである。

(五) 小 括

本章での考察の結果を総括していきたい。

前章で考察したように、父のミカエル二世の政権は、自らと出自を同じくするテマの幹部たちによって支えられていた政権であった。それゆえ中央における皇帝の支持基盤はきわめて脆弱なままであった。テオフィロスが強力な権力を行使するためには中央における皇帝の統制力を回復させて、大きな発言力を持つにいたっていた高官や高位保持者たちの発言力を制限させる必要性があった。

この困難な課題を、テオフィロスは巧みに実現していった。テオフィロスは政治を遂行するにあたって、それ以前の皇帝には例を見ないほど高官や高位保持者たちを尊重する姿勢を示した。特に即位直後の、レオン五世の暗殺者の処刑はきわめて大きな成果をもたらした。この措置によって、テオフィロスは自らの一族にまとわりついていた悪いイメージを払拭することに成功したばかりでなく、高官や高位保持者たちからなる元老院を尊重しながら政治をすすめていく、という姿勢を明確に示すことにも成功したのである。元老院を尊重するというテオフィロスの姿勢は、治世を通じて不変であった。それは高官や高位保持者たちの好感を獲得するのに資した。

その一方で、テオフィロスは高官や高位保持者たちの発言力を制約するための行動をも進めた。まず軍事力は完全にテオフィロスの強力な影響下にあった。特に首都やその近郊に常駐するタグマタや中央艦隊、宮廷内で皇帝に直屬する軍事力がテオフィロスの強力な支持基盤になったことは、軍事力に対して深い利害関係を持たない首都の高官や高位保持者たちにとっては大きな脅威となり、皇帝に対して不穏な行動をとることは困難だった。

テオフィロスの支持基盤は軍だけではなかった。高官や高位保持者たちの牙城たる中央行政機構にもテオフィロスの手は及んだ。テオフィロスは例を見ないほど積極的に政治に参画し、高官のみならず中堅官僚たちとも親密な関係を結んでいた。またテオフィロスは親密な人間関係を構築するにあたって、競馬などの娯楽や、文化活動、そして建築活動などをも駆使していた。こうした手法はミカエル三世にも受け継がれていく。

前章で分析したように中央の高官や高位保持者たちは大きな政治的影響力を持っており、皇帝といえども彼らに対して絶対的な命令権をもつものではなくなっていた。しかしテオフィロスの時代には、中央行政機構内で新たな人材がかなり多く登用されている。テオフィロス時代には中央行政機構内で指導的な役割を果たしていた人物は、テオフィロスと親密な人間関係を持ち、信頼できる人々へと替わっていたのである。ただこうした変化はテオフィロス時代に一気に行われたのではなく、ミカエル二世時代の後半から徐々に行われた結果であろう。ミカエル二世やテオフィロスは、自己の意図に忠実な人材を補充することによって、高官や高位保持者たちの交代・刷新を漸進的に行い、自らの政権基盤を強固にしていたのである。

新たに登用された人々は、恐らくテオドロの一族に特徴的なように、かなり高い社会的背景を持った、地方では有力な家門の出身であったと考えられる。すなわち前章で検討した、ミカエル二世に忠実な集団を形成したテーマの幹部たちと同様の社会的背景を持った人々である。そして注意すべきは、前章で検討したようにミカエル二世やテオフィロス自身、彼らと同様に小アジアの有力者出身であったことである。すなわち新たに登用された人々はミカエル二世やテオフィロスと

同様の社会的背景をもっていた人々であり、かつての同僚でもあった。皇帝は信頼できる側近として地方の有力者たちを捉え、中央政府のメンバーの補充の際に彼らを好んで登用した。その一方で地方の有力者たちは皇帝を自らの利害の代弁者として捉え、皇帝の忠実な側近になることで自らの社会的地位を高めようとしていた。ミカエル二世やテオフィロスの政権は、小アジアのテマ幹部出身者による連合政権としての性格も色濃くもっている。

テオフィロスは血縁関係をも括用した。テオフィロスは政権の強化のために、血縁関係を利用した親族のネットワークを形成した。その際に結節点となったのは、皇后のテオドラの一族であった。テオドラの一族を通じて、テオフィロスは多くの家門との血縁関係を構築した。テオフィロスが血縁関係を主に構築したのは、ミカエル二世・テオフィロスの時代に新たに頭角を現してきた一族が中心である。すなわち自らと同様の社会的背景を持った人々が中心なのである。その結果、皇帝の信頼する人物たちは中央政府内において安定した地位を確立する。

このような行動を行えた背景として、皇帝権力と高官・高位保持者たちとの関係を無視することはできない。第二章で述べたように、八世紀末以降、高官たちは次第に独自性を強めつつあった。しかしながら彼らの政治的影響力の源泉が中央行政機構である限り、彼らは皇帝権力に全く依存しない、独自の集団としての行動をとることはできなかった。すなわち高官や高位保持者たちは皇帝権力から完全に独立した存在ではありえなかった。皇帝権力が動揺していた時期には大きな政治的影響力を発揮していた高官・高位保持者たちも、政情が安定して皇帝権力の動揺が収まるにつれ、独自の発言力を後退させていく。その意味で、八世紀末から九世紀初頭における高官・高位保持者たちの発言力の強さは、弱体化していた皇帝権力に代わって中央の優位を維持するため前面に出ていたと考えられる。

かくしてテオフィロス即位以前には皇帝権力を制約する存在であった高官や高位保持者たちを皇帝の強力な支持基盤へと作りかえることが可能となった。そして特にテオフィロスによって新たに登用された人々は皇帝権力に依存する傾向が強くなり、皇帝の発言力の強化につながった。また同時に、地方の有力者たちを中央政府内へ取りこみ、中央政府の政治的実

力を強化するところにながったのである。

- ① ThM p. 148, LG p. 214.
- ② J. B. Bury, op. cit., pp. 124-125.; Treadgold, pp. 271-272.
- ③ ThM p. 150, LG p. 217.
- ④ ThC pp. 138-139, Gen. pp. 51-52.
- ⑤ 別掲 ThM pp. 154-155, LG pp. 222-223.
- ⑥ ThC pp. 87-88.
- ⑦ ThC pp. 122-124.
- ⑧ ナンペロス時代には、皇帝に私的に奉仕する宦官や家産官僚たちが活発に利用されるようになる。彼らは九世紀後半以降はビザンツ帝国の政情に大きな影響を及ぼすようになるが、ナンペロスの時代にはこの展開の契機となっていない。
- ⑨ *Vita Athanaii Junioris*, pp. 209-211.; ThM pp. 148-149, LG pp. 215-216.
- ⑩ cf. Tinnelfeld, „Zum profanen Mimos in Byzanz nach dem Verdikt des Trullanums (691)“, *Byzantinica* 6 (1974), S. 321-343, S. 329-330.
- ⑪ ThM pp. 155-156, LG pp. 224-225.
- ⑫ 拙稿「マカヒヤ三世と『従者団』」参照。
- ⑬ ThM p. 152, LG p. 220.
- ⑭ 前掲拙稿「マカヒヤ三世と『従者団』」六六頁参照。
- ⑮ イオヌスの乱の際にマカヒヤ二世側についた(ThC pp. 53-54, Gen. pp. 23-24)。ブルメニフコンのストラテゴスのオルビアノスは、テオフィロス時代にも小アジアのテーマのストラテゴスを務めていた。*Vita Sancti Ioannis*, p. 365, 427. またアレクサンドロール下は「テオフィラティオンのストラテゴスをテオフィロスの母方の従兄弟と考

① *Vita* 23° Treadgold, pp. 299-300, 442-443.

② *Vita duo et quadraginta martyres Amortensi*, in: *Mémoires de l'Académie imp. de Saint-Petersburg VII^e série*, VI-2 (1905), pp. 22-36.

③ ThC pp. 135-136.

④ *The History of al-Tabarī vol. 34: Incipient Decline*, Albany, 1989, p. 124.

⑤ Winkelmann, S. 72, 117-118.

⑥ ThM pp. 148-149, LG pp. 215-216.

⑦ ThM pp. 148-149, LG pp. 215-216, ThC p. 136, Gen. p. 58.

⑧ cf. Haldon, p. 252.

⑨ J. -B. Chabot(†), *Chronique de Michèle Syrien*, vol. III, Paris, 1905, p. 95.; cf. Treadgold, pp. 301, 443-444.

⑩ *マカヒヤ三世の臣弟のイオヌスの墓文*° ThM p. 150, LG p. 218.

⑪ ThC p. 38, 148, Gen p. 23.

⑫ *マカヒヤ三世は三八年頃と考えている*° Treadgold, p. 301.

⑬ ナンペロスの暗殺については前掲拙稿「マカヒヤ三世と『従者団』」五五頁参照。

⑭ *Scriphores Originum Constantinopolitanarum*, Leipzig. 1901-07, pp. 223-225.

⑮ 前掲拙稿「マカヒヤ三世と『従者団』」六五-六六頁参照。

⑯ 八世紀末から九世紀初頭にかけてマトリキオスだったニケタス・モノテロスがテオドラの一族とやわらびる。彼とモウスタライオスとは親しく血縁関係がある。 *Vita Nicolae Patrii*, in: D. Papachrys-

santhou, "Un Confesseur du second Iconoclasm: la Vie du Patriarche Nicetas (†836)", *TMF* 3 (1968), pp. 309-351, p. 325.

④ ThC p. 137, 175.

⑤ ThM p. 148, LG p. 215.

⑥ ThC pp. 88-91, ThM p. 147, LG pp. 219-214. 花嫁シモンとユダヤの W. Treadgold, "The Bride-Shows of the Byzantine Emperors", *Byzantion* 49 (1979), pp. 385-413.

⑦ ThC p. 126, 135, ThM pp. 155, 181-182, LG p. 218, 261.: Winkehnann, S. 163-164.

⑧ ユダヤのユダヤ ThM p. 152, LG p. 220. ユダヤのユダヤ ThM pp. 148-149, LG pp. 215-216. ユダヤのユダヤ ThC p. 137. ヘルキオスニコケテマナスのユダヤは Synaxarium Ecclesiae Constantinopolitanae (*Protypactum ad MSS Novembri*), Bruxelles, 1902, c. 777-778.

⑨ 八世紀末の人物はマ・テルメニアコンのストラテゴス。一〇世紀初頭の人物はロマンヌ一世レカペノス(在位九二〇—九四四年)の娘婿でドゥルンガリオス・トゥー・フレイム。

⑩ ThC pp. 174-175.

⑪ ThC pp. 107-109, ThM pp. 149-150, LG pp. 216-218.

五 おわりに

八四二年、三〇歳余りでテオフィロスは没した。テオフィロスの後を継いだのはわずか二歳の息子、ミカエル三世であった。ミカエル三世は治世前半は母親のテオドラの摂政下、そして治世の後半はテオドラの兄弟で叔父に当たたるバルダスとともに、政治を行った。ミカエル三世は『続テオフィアネス年代記』などの年代記では暗愚な君主として描写されているが、しかし実際には別稿で分析したように、特に大きな失政もなく九世紀中盤のビザンツ帝国を主導していた。実際、ミカエル三世の二五年の治世の間には、ビザンツ帝国のその後の展開にとっても重要な意味を持つ政策が次々と打ち出されている。八四三年のイコン崇拜の復活はテオドラの主導のもと行われたものであるが、八六三年の小アジア東部戦線での対ムスリム戦の大勝、八六四年のブルガリアの改宗とそれに前後するスラヴ人への布教活動、ローマ教会との対立(いわゆる「フォティオスのシスマ」)などは、ミカエル三世が自ら主導して政策を進めていた可能性が高い。またミカエル二世時代にムスリムに奪われた地中海の制海権奪回のため、海軍力が急速に強化されていったのもミカエル三世の時代である。

文化的にも建築活動や著作活動がテオフィロス時代にまして活発になっている。ミカエル三世時代にはビザンツ帝国の政情が安定し、さまざまな点でさまざまな成果が生み出されたのである。^①

だが、こうした成果を生み出すことができた背景に、本稿で考察を行ったテオフィロスの行動と、彼の築き上げた成果があったことを忘れてはならない。ミカエル三世は叔父のバルガスや、コンスタンティノープル総大主教のフォティオスらとともに政治を行っていることが確認できるが、彼らはテオフィロスによって皇帝一門に組み込まれた人々である。事実別稿でも考察したように、ミカエル三世は高官たちと緊密なネットワークを構築・維持しつつ、安定した政権を現出させていた。このような政権のあり方は、実は本稿で考察したように、父親のテオフィロスが構築したものである。ミカエルはテオフィロスから高官・高位保持者たちのネットワークを引き継ぎ、維持しながら多くの政治的成果を積み上げていったのである。

このように、テオフィロスとミカエル三世の時代は皇帝と高官・高位保持者たちの関係はきわめて安定し、両者が密接に連関しつつ、安定した政治体制を現出させていたことが看取できる。またそれと同時に、地方の有力者たちと皇帝の結びつきも大きな意味を持っていた。地方の有力者たちを中央政府へ取りこむことによって、地方に対する中央政府の優越を一層確かなものにするのができたからである。ビザンツ帝国においては中央集権的皇帝専制体制はまさに彼らの時代、九世紀中盤に頂点に達する。このことは、このような体制が皇帝と高官・高位保持者たちとの親密かつ強力なネットワーク、及び地方に対する中央の優越によって支えられていたことを物語っている。本稿でも述べたように、高官や高位保持者たちが政治的実力の源泉としていたのは中央行政機構であった。確かに、八世紀後半以降高官や高位保持者たちは急速に政治的影響力を増大させ、九世紀初頭には皇帝に対しても大きな影響力を行使できるまでになっていた。しかし中央行政機構が皇帝を頂点とし、皇帝によって主導される体制をとっている以上、高官・高位保持者たちにとっても強力に安定した皇帝権力は不可欠のものであった。高官や高位保持者たちはなお、皇帝権力から完全に独立して成立しうる存在では

なかったのである。九世紀初頭のように皇帝権力が不安定で、動揺を繰り返していた時代には高官や高位保持者たちは大きな政治的影響力を持っていたが、このような時代にはビザンツ国家それ自体が動揺している。帝国の安定のためには、皇帝と高官・高位保持者たちの密接な結びつきが不可欠だったのである。

一方ミカエル三世が暗殺され、バシレイオス一世が即位して以降は皇帝と高官たち、そして中央と地方とのこのような関係は、次第に崩壊を始めていく。九世紀末以降、皇帝と高官・高位保持者たちの関係、さらにはビザンツ帝国の政治支配層と政治体制は根本的な変化を経験し始める。^② それゆえテオフィロスとミカエル三世の時代は、皇帝と高官・高位保持者たちの関係が最も安定した時代であると同時に、この両者が支えていた中央集権的皇帝専制体制が最も安定して機能した時代であると結論づけられる。九世紀中盤は、ビザンツ帝国の政治体制の中で、一つの頂点をなしているのである。

① 前掲拙稿「ミカエル三世と『従者団』」参照。

② 九世紀末以降の変化については、別稿を準備中である。

The Reconstitution of Byzantine Imperial Authority
under the Reign of Theophilus (829-842)

by

KOBAYASHI Isao

Until the accession of the Emperor Theophilus, The Byzantine Empire was wracked with instability as center vied with periphery for authority, and high-ranking officials increased their powers under the reign of a series of short-lived emperors. Although ruling for a rather short period of time, Theophilus established a stable and enduring political system.

Theophilus was able to exercise authority in the provinces by relying upon continuing contacts with provincial elites, dating back to his father, Michael II (820-9), who was of provincial origins. Theophilus was also able to counter the entrenched power of ranking officials by promoting provincial elites into the central bureaucracy. By establishing kinship ties with these newly-promoted elites, Theophilus not only dominated the central government, but achieved extensive provincial influence as well, which paved the way for political stability in Byzantium.